Osaka University Knowledge Archive

Title	生成される平和の民族誌ソロモン諸島における「民族紛争」と日常性の人類学
Author(s)	藤井, 真一
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/73503
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　藤井　真一　　）	
論文題名	生成される平和の民族誌 ソロモン諸島における「民族紛争」と日常性の人類学

論文内容の要旨

本論は、ソロモン諸島ガダルカナル島の社会を研究対象地域として、当該地域で1998年から2003年にかけて生じた「エスニック・テンション」と呼ばれる武力紛争に着眼しつつ、紛争渦中ならびに紛争後の当該社会における日常性を考察するものである。本論の目的は次の二点である。第一に、ソロモン諸島ガダルカナル島北東部の一言語集団に関する民族誌資料を提示することである。ガダルカナル島北東部における民族誌資料を提示することによって、人類学的・民族誌的な知の蓄積に対して、ささやかながら貢献することを一つ目の目的とする。第二に、ソロモン諸島の「エスニック・テンション」に照準を合わせつつ、周辺視野に入る彼らの日常生活に焦点を当てて考察することで、「エスニック・テンション」それ自体をできる限り包括的に捉えることを試みることである。とりわけ、暴力を社会病理として特別視する傾向に抗い、紛争渦中における日常性を描き出す。

第一章では、本論の理論的枠組みを確定すべく、「平和の人類学」と呼びうる一群の研究の到達点と課題を検討し、さらにメラネシアにおける紛争・平和研究と贈与交換論の交差点を探った。

第二章では、本論の研究対象地域となるソロモン諸島ガダルカナル島について、調査地概要を示すとともに、筆者の臨地調査に基づいてガダルカナル島北東部に関する民族誌資料を提示した。

第三章では、本論で中心的に取り上げる「エスニック・テンション」の背景として、ソロモン諸島（とりわけガダルカナル島）の植民地史、政治経済史、移住史を整理した。そのうえで、ガダルカナル島北東部という場がソロモン諸島国の中でも特異な位置づけにあることを示した。

第四章では、「エスニック・テンション」の背景と経過、ならびに社会的要因と経済社会的影響について分析した。そこでは、同じ島の人間であるとはいえども必ずしも集団意識を共有していなかったこと、それゆえ「エスニック・テンション」のガダルカナル側武装集団であっても武装集団の主要な成員とガダルカナル島北東部の人びとの間では温度差があったことを示した。

第五章では、「エスニック・テンション」に対するガダルカナル島の人びとの対応について、積極的に加担した人びとと消極的に関与した人びと、紛争から物理的に距離をとるなどして否定的な関係を取り結んだ人びとに分けて調査から得られた資料を提示、分析した。また、ガダルカナル島北東部から避難せず留まったマライタ系住民が、「ペル・ウル」と呼ばれる贈与儀礼を行なうことによって生存を確保していたことを示した。

第六章では、「エスニック・テンション」の終結までにみられた紛争解決のためのさまざまな試みを整理、検討した。とりわけ、「上からの平和」と「下からの平和」という二分法的な捉え方を排するべく、草の根レベルと国家レベルと国際レベルのそれぞれがどのように紛争処理を試みたのかについて分析した。

第七章では、「エスニック・テンション」終結後の社会再構築の取り組みとして最重要課題であった和解と関係修復という問題が、いかに取り組まれたのかを論じた。特に、和解と関係修復のために活動したソロモン諸島真実和解委員会を取り上げ、中心的な活動として展開された証言聴取という活動と、ソロモン諸島における伝統的な紛争処理であるコンペンセーションとが緊張関係を孕んでいたことを指摘し、コンペンセーションという実践には二つの捉え方がありうることを論じた。

結論では、各章の総括ならびに全体を通じた考察を行なった。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　藤井　真一　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教 授	白川　千尋
	副 査　教 授	栗本　英世
	副 査　准教授	森田　敦郎

論文審査の結果の要旨

本学位請求論文は、現代の国際社会が取り組むべき喫緊の課題の一つとなっている武力紛争をめぐる民族誌的・人類学的研究である。南太平洋のソロモン諸島国では、1998年から2003年にかけてエスニック・テンションと呼ばれる武力紛争が生じた。異なる民族集団の対立と捉えられ、それゆえエスニック・テンション（民族紛争）と称されてきたこの紛争では、約200人の死者と当時のソロモン諸島国の人口の約１割に相当する35,000人あまりの国内避難者が出た。本論文はこの武力紛争を対象としており、その舞台となったガダルカナル島北部での計８回、約20カ月に及ぶ人類学的フィールドワークによって得られたきわめて詳細なデータと豊かな知見に基づくものである。

本論文の目的は、上述のエスニック・テンションを対象としつつ、その渦中、およびその後のガダルカナル島北部の人々の日常生活に焦点を当てることで、紛争と平和の動態的な関係を民族誌的に明らかにすることである。本論文は序章と結論、および七つの章から成る。序章に続く第１章ではまず、本論文と主題的に深く関わる紛争や戦争、暴力、平和に関する人類学的先行研究が批判的に吟味される。そして、先行研究の抱える課題や問題点との関連で本論文の視座や着眼点などが明示される。その後、研究対象地のガダルカナル島北部とそこで暮らす人々の日常生活に関する民族誌的描写がなされ（第２章）、彼らの暮らす地域がエスニック・テンションの舞台となるに至った歴史的背景が検討された後（第３章）、第４章でエスニック・テンションに焦点が当てられ、それがどのように勃発し、拡大するに至ったかが時間軸に沿って明らかにされる。一方、第５章では、この紛争に対するガダルカナルの人々の関わり方が「積極的加担」、「消極的関与」、「否定的関係」という三つの型に整理されることを通じて分析される。この章は後の第７章と並んで本論文の白眉の一つである。続く第６章では、エスニック・テンションをめぐって行われた紛争解決の多様な取り組みが、多国間レベル、二国間レベル、国家レベル、草の根レベルの四つの次元との関連で分析の対象となり、さらに第７章では、エスニック・テンション後に国家レベルで導入された真実和解委員会の活動と、ガダルカナルの人々の間で実践されてきた在来の紛争処理方法であるコンペンセーションが詳細に検討される。そして、以上の一連の論述を踏まえて、最後の結論では各章の総括と総合的な考察が行われ、コンペンセーションをはじめとする人々の間の絶え間のない互酬的なやりとりとそれを通じた社会関係の操作が、紛争の渦中、およびその後の暴力の発現や敵対意識の顕在化を妨げるとともに、人々の日常生活のなかに、紛争後のみならず紛争渦中にあってさえも、平和を生成しているとの結論が導出されている。

本論文の学術的意義の一つは、紛争渦中の人々の日常生活がきわめて生き生きと活写されている点にある。こうした民族誌的記述は従来の紛争や戦争に関する人類学的研究には往々にして希薄だったものであり、非常に貴重なものである。また、先行研究では「紛争から平和へ」という両者の通時的関係が主な考察の対象となってきたのに対し、本論文はそうした通時的関係のみならず、「紛争渦中の平和」という共時的関係をも検討の射程に含めている。このように従来の研究の視座や理論的枠組みを拡張したという点においても、本論文は重要な理論的意義を有している。さらに、先行研究では平和な状態はもっぱら紛争のない状態、つまりある種の欠如態として消極的に捉えられてきたのに対して、本論文はそうした先行研究の限界を乗り越え、平和を人々の互酬的なやりとりに彩られた日常性によって特徴付けられるものとして積極的に捉えている点なども大きな学術的貢献と言える。

本論文はこのように多くの学術的意義をもつ優れた研究と評価し得るものであり、よって博士（人間科学）の学位を授与するのにふさわしいものと判定した。